金沢文庫本群書治要尚書に於ける訓読の文体差

陳　翰柯

はじめに

金沢文庫本『群書治要』は、全五十巻の内、巻四・巻十三・巻二十の三巻のみを欠く四十七巻を存しており、ほぼ全巻を有する『群書治要』の鎌倉時代の古写本として著名である。しかも金沢文庫本経部は、明経道の清原教隆（一一九九～一二六五）の加点した本であることが奥書より知られ[1]、加点年代や経緯、加点者の素性等が明確な漢籍訓点資料として注目されてきた。例えば、本論文の研究対象である巻二「尚書」の奥書に左の識語が存している。

建長五年（一二五三）七月一九日依洒掃少尹
尊閣教命校本書加愚点了
前参河守清原（教隆花押）

就中、巻二の「尚書」は古来、「詰屈聱牙」と言われ[2]、非常に難読であるが故に、注釈文は他の巻より更に詳密である。一方、「尚書」の内容は堯舜から夏・殷・周歴代の帝王の言行録を整理した演説集である為に、正文に地文と会話文とが混在している。即ち、全巻が地文、会話文、注文の三つの文体から構成されている。

本論文ではまず、「尚書」における正文、注文及びその中に含まれる会話文の文体差について帰納し、かかる課題に対する方法論を模索するための試論として本論文を認めてみる。

一、用例の処理基準

膠着語たる日本語に於いて、微妙なニュアンスを表す役割を負っているヴォイス・アスペクト・認め方・テンス・モダリティは、中止文の句末にも出現するが、多くは文末に存しているため、文末の分析は、文体差を考えてみるのに有効性が高いと想定できる。故に今回の研究で文末に注目することとする。そこで、上述の如く、金沢文庫本『群書治要』巻二「尚書」（以下は「尚書」とする）の正文、注文、会話文の文体差を、文末表現と読み添え語の有様から比較・検討する。それに先立ち、先ず、文末表現の比較における用例採取上の問題点から、本稿の態度を明らかにしておきたいと思う。

本論文に取り上げる「尚書」は仮名点の加点が厚い点本とは雖も、一音節一音節が復元できるレベルの資料ではない。延いて言えば、そもそもそのような訓点資料は期待できない。平仮名の和文資料と言えども、漢字表記が混入する以上、一切の語形が完全に確定できる訳ではないと考えられる。訓点資料に於いては更に文章全体に占める不確定要素の比率が高いのである。

右の如き憾みが存する為、「尚書」の文末表現を集計比較しようとするとき、文末に、文末を決定する仮名点、もしくは、文末を決定できるヲコト点の加点のない場合や、文末決定の最たる拠り所となる句読点の曖昧な部分について、本論文に於ける拠理基準の態度を検討しておく必要があるだろう。

訓点資料では、一般に、言語資料として比較的良質のものには、仮名や句切点、又は仮名とヲコト点との加点が厚く存するのであり、その訓点資料に於いては、句切点により文末の認定が比較的容易なものが多い。会話部分に関しても、平安初期の資料を中心に、「イハク…ト」「イハク…トイフ」等の呼応が比較的に整然と行われる資料が存し、その認定も容易であることが多い。ここに取り上げた「尚書」は仮名・ヲコト点の加点資料であるが、文末と考えられる箇所には、

○己は亡（音）スル［之］道ナリ（「尚書」172・注文）

○是淫ー過（の）［之］風ー俗ナリ（「尚書」194・注文）

○厥の先（音）宗ー廟（二）を遺（二）レて祀（ら）（返）弗（「尚書」297・正文）

右の如く、必ずしも句点が打たれている訳ではない。又、会話部分も

○殷の民辟（返）に在（ら）は・予（わ）曰ク辟セヨトイハン。（「尚書」475・正文　傍線は筆者注、以下同）

右の如く、「トイフ」等の語が会話文の終に読み添えている場合が存するのに対して

○益曰（イ）＼マウサク・帝徳・広ー運ニシて乃（ち）聖・乃（ち）神・乃（ち）武・乃（ち）文ナリ　皇天・眷（カヘリ）ミ＿命（メイ）シて奄（ヲチ）シク・四ー海（二）（返）を有（タ）（も）（二）（ち）て天下（二）の君（二）為（タ）リ（「尚書」41～43・正文）

の如く、「イハク」、「イフ」等に対する呼応語が欠けている場合も存する。即ち、右記の如き呼応語の出現が任意であって、直ちに文末・会話部分の認定について整わない場面が生じる。同類の原漢文に於いても

○曰（イ）（は）（く）・大国は其（の）力を畏リ。小国は其（の）徳を懐（ナツ）クト

イヘリ（巻五『春秋右氏伝中』493・正文）

○曰（イ（は））（く）吾過ツ所を知レリ［矣］。将に之（を）改メン。（巻五『春秋右氏伝中』12・正文）

右の如く、加点されたり加点されなかったりと傾向性を認めがたい。完全に確定することはできないが、本論文では「トイハン」、「トイヘリ」等の呼応語のない場合、原則として補訓しないこととする。

筆者は文末及び会話部分の認定に於いてはそれぞれの訳注書等を参照したが、当時の訓読を再現する面では、恣意の介在する余地を認めざるを得ない。しかしながら、会話文の始まりの部分については、「曰」「言」等の原漢文の表記が存しており、少なくとも、これに依っての認定が可能であろう。

又、「尚書」中、文末にヲコト点もしくは仮名点のない場合が存する。例えば、注文の中には、

○休（平）は美［也］（「尚書」55・注文）

右の如き文が多数存する。この一文に於いては、金沢文庫本『群書治要』の注文に使われている「休」字を「美」字と同様の意味として解釈したパターンの注であるが、「美」字には読み添え語がない。同様の注の類例を金沢文庫本『群書治要』に求めれば、

○牧は養［也］（巻一『周易』199・注文）

○格は法「也」（巻十『孔子家語149・注文）

○蹊は径［也］。（巻五『春秋右氏伝中』54・注文）

右の例が存する。専ら注文では「AはB」または「AはB也」のAもBも単字の場合は、基本的方針として補読を行わないという原則を立てても矛盾を生じないように考える。又、

○瑟（返）を鼓（音）シ・笙を吹。（巻三『毛詩』179・正文）

の如き場合では、文末は句読点の存在によって確定できるが、「吹」字に加点がなく、右の「AはB」と異なり、推読せざるを得ない。このような例は説明文で用いられている場合が多数である。さすれば、この場合は、完全に確定することはできないが、本論文では動詞終止形として訓読することとする。

このような推定の正確さについては疑問も生じるかと考えられるが、訓点資料の中で全漢字に傍訓を施したものは恐らく得られないと考えられ、このような資料上のハンディキャップは、金沢文庫本『群書治要』のみならず、当時の訓点資料全般についての事柄であるから、訓読方針を明示することで、突き詰めれば訓読文が観念的である事は、免れないが、二資料以上の比較に同質の資料が用意できるものと考える。

二、「尚書」の文末体系の素描

正文と注文との文体差については、文末の「ゾ」が注文または正

表一

	〈名詞〉	〈感動詞〉	〈動詞〉	終止形	連体形	命令形	〈形容詞〉	終止形	命令形
正文・地文			60 (77%)	57 (73%)	2 (3%)	1 (1%)	2 (3%)	2 (3%)	
正文・会話	12 (1.7%)	1 (0.1%)	342 (50%)	244 (35%)		98 (14%)	105 (15%)	65 (9%)	40 (6%)
注文	143 (14%)		440 (42%)	418 (40%)	1 (0.01%)	21 (2%)	111 (11%)	84 (8%)	27 (3%)

〈形容動詞〉終止形	〈助動詞〉	ラル	シム	タリ（完了）	ヌ	リ	ナリ	ヲ	ヤ
1 (1%)	15 (19%)		3 (4%)		1 (1%)	1 (1%)	3 (4%)		
1 (0.1%)	212 (31%)		17 (2%)	4 (0.6%)	3 (0.4%)	18 (3%)	56 (8%)	1 (0.1%)	1
2 (0.02%)	300 (29%)	1 (0.01%)	18 (2%)	12 (1%)	1 (0.01%)	22 (2%)	101 (10%)		6 (0.06%)

	ナム	ゾ	カナ	ハ	総数
					78 (100%)
	2 (0.2%)		2 (0.2%)	1 (0.1%)	689 (100%)
	1 (0.01%)	42 (4%)	2 (0.02%)	4	1048 (100%)

文の注釈的部分に集中するとした研究が存する[4]。語彙的にも、「言（イフコヽロ）ハ」、「トイハ」等は、漢籍注文の套語であり、注文の文章を特徴付けるものであろう。又、「尚書」の正文と注文とは作成された時代も異なる。「尚書」の正文は凡そ中国の戦国時代（前四〇三～前二二一）に成立したが、それに付された割注は鄭玄の注[5]で、後漢（二五～二二〇）の文である。この両者の間には数百年の間隔が存し、いきおい両者の中国語文間に相違が生じると想定できるので、これを念頭に置いておく必要がある。なお、訓読文については、唐小説や仏教説話集での地文と会話文との文体差に関わっても、和文系語の出現が会話部分に片寄ることが指摘されている[6]。本論文は、こうした先学の御高論に導かれて、「尚書」を中心に、文末表現からの比較を行って、訓読文体の文体差の一端を記述してみたい。

さて、「尚書」中の文末体系は如何なるものだろうか。次に具体的用例を取りながら類別して検討してみる。この作業の結果、便宜上、概ねに「㈠名詞、㈡感動詞、㈢動詞、㈣形容詞、㈤形容動詞、㈥助動詞、㈦助詞」七種類に分類して配列することとした。又、同一語はこの中の何れか一項に分類し、二項目以上に重複して属させるものはない。

さて、「尚書」の中の文末を全て抽出し、比率を付け、整理したものが表一である。

※助動詞命令形文末の数は［］中に入れておく。例以下同。

右掲の表一から「尚書」に於いて各文末表現の地文、会話文及び注文中の性格の差を窺うことができるだろう。確かに、先学が説かれた「和文特有語⇔共通語⇔訓読特有語」の如き、より鮮明な対立とは異なり、和文特有語対訓読特有語の差が見えるわけではないが、各文末に分布上の偏りのあることは事実である。右の内容を踏まえて「尚書」における各文体の文末表現上の特徴を記述すると、次の如くになる。

先ず、地文に於いて動詞の文末が最も多く、（60例77％、例数及びそれが各文体中に占めている凡その比率、以下同）が存する。即ち、地文の文末は、ムードでは、動詞終止形による終止法を中心に文を進めている。その内に動詞終止形で文を終止する場合の比率が三つの文体中で最も高く、（73％）となり、名詞の文末は見えない。動詞命令形の文末も少数であり、唯（1例）が存するのみである。形容詞文末も数少なく、（2例3％）が存するだけである。又、助動詞と助詞との読み添え語も数少なく、助動詞文末は（15例19％）だけである上に、「ゾ」を含めて助詞の文末が全く見られない。更に、助動詞の内に「ベシ」及び「ム」は見出されていない。且つ、「ナリ」の比率も会話文や注文より相対的に低い。又、「ゴトシ」の比況表現が存するが、「ナホ・・ゴトシ」と再読する形式で比況を表す場合が見られない。さすれば、会話文及び注文の文末が、地文に比べてその表現が豊かであること、即ち、地文の文末表現は動詞終止形を中心としており、最も変化に乏しいことを示しているものと判断する。

次に、会話文に於いて動詞文末の比率は地文より低いが、注文の（440例42％）より多く、（342例50％）となる。その内に動詞命令形で文を終止する場合の比率が最も高くて、会話文（14％）が存するのに対して、注文には（21例2％）が存するだけである。形容詞文末の比率は三つの文体中に於いて最も高く、会話文（15％）となる。助動詞と助詞との読み添え語は注文と同様に幅広く用いられているが、地文と同様に助詞の「ゾ」の文末が全く見られない。これを含めて考えると、助詞文末全体の比率は注文に比べて相対的に少なく、会話文（2％）、注文（4％）となる。又、文末に助動詞の「ベシ」と「ム」との読み添え語が存するが、その内に、「ベシ」の比率は注文より低く、「ベシ」：会話文（5例0.7％）、注文（28例3％）となる。これに対して「ム」文末の比率は注文より高く、［ム］：会話文（38例6％）、注文（26例3％）となる。且つ、地文と同様に「ナホ・・ゴトシ」の再読する形式で比況を表す場合が見られない。

最後に、注文に於いて形容詞文末の比率は会話文より低いが、地文より相対的に高く、地文（2例3％）、会話文（105例15％）、注文（111例11％）となる。会話文と同様に助動詞と助詞との読み添え語が頻用されている。就中、地文と会話文で見えない「ゾ」と「ナホ・・ゴトシ」とが注文の中に数多く見出されており、且つ、注文中の助詞文末の大部分が「ゾ」である。

三、金沢文庫本『群書治要』巻一「序文」と「尚書」の地文

以上は「尚書」中の文末体系を素描したが、この内、地文での語彙量は会話文及び注文より数少なく、地文（78）の文末が存するに対して会話文（689）、注文（1048）が存する。さすれば、「尚書」の地文で出現している言語事項に偶然性が伴っている可能性が考えられるだろう。よってここで会話文と注文とのない金沢文庫本『群書治要』巻一「序文」（以下は「序文」とする）の文末体系を「尚書」の地文の文末体系と対照する。これによって地文の文体特徴を更に論じることとする。

表二

	動詞			形容詞終止形	形容動詞終止形	助動詞					
	終止形	連体形	命令形			シム	ヌ	リ	ナリ	タリ（断定）	ゴトシ
「尚書」・地文	57 (73%)	2 (3%)	1 (1%)	2 (3%)	1 (1%)	3 (4%)	1 (1%)	1 (1%)	3 (4%)	2 (3%)	1 (1%)
「序文」	42 (71%)		1 (2%)	4 (7%)				3 (5%)	2 (3%)	1 (2%)	1 (2%)

総数	助詞・カ	助動詞			
		アラズ	リ	ズ	ム
78			1 (1%)	4 (5%)	
57	1 (2%)	1 (2%)	3 (5%)		1 (2%)

さて、「序文」の文末体系は如何なるものだろうか。上記の「尚書」地文の文末体系を「序文」の文末体系と対照して、両者に存する文末を全て抽出して整理すると、右掲の表二の如くなる。

この両者の文末表現に於いて、共通或いは近似しているところを整理すると、

㋑全体は動詞終止形を中心として文を進めている。

㋺助動詞及び助詞の文末は両者に於いて比較的に数少ない。

㋩動詞命令形の文末は両者に於いて稀有である。

㋥断定助動詞「ナリ・タリ」の比率は両者の文末体系に於いて近似している。

㋭比況助動詞「ゴトシ」の文末は両者に於いて同様に（1）が存し、その比率も近い。

右の如くになる。逆に、両者の文末体系に於いて差の存するところは、

㋬動詞連体形の文末は「尚書」地文中に（2例2％）が存するのに対して「序文」に見られない。

㋮形容詞終止形の文末は「尚書」地文中に（2例3％）が存するのに対して「序文」に（4例7％）が存する。

㋯形容動詞終止形の文末は「尚書」地文中に（1）が存するのに対して「序文」に見られない。

㋰使役助動詞の「シム」の文末は「尚書」地文中で散見され、（2例3％）が存するのに対して「序文」では見出せない。

㋱完了助動詞の内に、「ヌ」の文末は「尚書」地文中に（1）が存するのに対して「序文」に見られない。

㋲「リ」の文末は「尚書」地文中に（1例1％）が存するのに対して「序文」に（3例7％）が存する。

㋳打消助動詞の内に、「ズ」の文末は「尚書」地文に於いて（4例5％）が存するのに対して「序文」では見出せない。

㋴一方、「アラズ」の文末は「序文」に（1例2％）が存するに対して「尚書」地文中に見られない。

㋵助詞の文末は「尚書」地文中に存していないが、「序文」に（1例2％）が存する。

右の如く帰納することができる。

単純に右の箇条数から見れば、確かに相違のあるところが多い。然るに、右の差の存する事項に示している差は非常に鮮明であるとは言えない。その内最大の相違でも㋳の（5％）及び㋲の（6％）にすぎない。しかも、これらの相違点は現有の漢字の出現に関与するところが多いと考えられる。例えば、㋳の場合は、「尚書」地文に於いて「ズ」の文末は（4）が存するが、

○烈―風・雷―雨・迷（返）タカハ弗。（「尚書」15・正文）

○十―旬にマテ反（返）ラ弗（「尚書」137・正文）

○明（返）ナラ弗（「尚書」204・正文）

○惟（れ）其官（一）ヲセ弗（ス）（二）。（「尚書」437・正文）

右の如く、全て漢字「弗」の訓である。即ち、「弗」は「序文」に存していない故に、この差が生じると考えられよう。これと類じ、㋲の場合は、「序文」に於いて「リ」の文末が（3例7％）存する。ところが、この（4）の内に、「以為」の再読する形、「オモヘラク…オモヘリ」中に表している例が（1）存する。さすれば、ここの「リ」も原漢文の「以為」の出現と伴っていると考えられるだろう。

その反面、共通箇条の㋑㋺㋩は主要な傾向を示しており、しかも原有の漢字と直接に関係しているとも考えにくい。

右の内容を踏まえて考えると、「尚書」地文と「序文」との間に、僅かな差が存するが、同様な傾向を示している。その文末体系は共に動詞終止形を中心としており、変化に乏しいと判断される。これ

によって前の結論を更に補強できるだろう。勿論、「序文」は「尚書」地文と共に短い文章である。ところが、両者からほぼ同然な傾向が見えるのは偶然ではないと考えてよかろう。

四、訓読文文体相違の要因

以上の内容に於いて「尚書」を中心に、一言語資料に於ける地文と会話文及び注文との訓読語に差のあることを記述した。なお、「尚書」と同じく経部に属する「序文」との比較を行い複数の資料間の訓読語、特に文末表現の異同を論じてきた。集計の結果を基として、訓読語に違いがあると認められよう。さらに、この差が何に起因したものであるかが問題となる。

言うまでもなく、漢文訓読語は日本語の一形態である。しかしながら、漢文訓読語はそれ以外の日本語と比較した場合、原理的に種々の重大な相違点をもっている。

先ず、一般の言語表現と漢文訓読語とは、次の点で本質的相違点が存する。即ち、一般の言語表現及び理解の過程は、時枝誠記氏によれば、左の如く図式化して説明される[7]。

具体的事物（表象）→概念→聴覚映像→音声→…（空間伝達過程）…→概念→具体的事物（表象）

右に記しているのは音声表現の場合で、文字表現の場合には、

概念（又は聴覚映像・音声）→文字…（空間伝達過程）…→概念（又は聴覚映像・音声）

これに対して訓読の場合には、先に文字言語として表現された「漢文」が存在し、それを読解し、更に、それに対応する日本語を想定して漢字の傍に記しつけるという、言語として二重の過程が存することになる。

理解（読解）過程　　表現（表記）過程

文字（漢字）→（聴覚映像・音声）→概念→（聴覚映像）→文字（仮名点・ヲコト点）

右の如く、外国語を基にして、それと同じ意味の自国語に変換することは、一般に「翻訳」と言われる。然るに、英語等について一般に「翻訳」という時は、原文とは別の場所に、日本語として書き訳すのが通常であるが、訓読に於いては、原漢文のすぐ傍に記し付けるという点が異なっている。又、一般の翻訳では、必ずしも原文の各語について逐字的に日本語に置換えるとは限らないが、訓読では極端な逐字訳が強制されている。又、一般の翻訳では、部分的摘訳ということも存するが、訓読では「不読」と称する特殊な場合以外、それが殆どない。結局、訓読というものは、極端な逐語訳であった[8]。さすれば、訓読語は原漢文に拘束されるところが多いと考えられるだろう。

前節に取り上げた文末表現についても既存の漢文の拘束によってかかる差違が生じたものとも考えることができるだろう。例えば、

○百一工を使て営（イトナ）ンて諸野（一）に求（二）メ[使]（再読）（三）（む）。（「尚書」250・正文）

○猶（ほ）草風に応（音）（上）シ而偃（一）スか［猶］（再読）（二）（し）（「尚書」473・注文）

○貌を［乎］止ー水（一）の察（音）（二）セ不・将に鑑（カヽミ）を［乎］哲（入）ー人（一）に取（二）（返）ラムと［将］（再読）（す）。（「序文」17）

○猶（ハカリコト）［之］・未（た）遠（から）［未］（再読）。（「毛詩」475）

右の如く、漢文本文に「使」、「当」、「将」等の再読文字が存する場合、文末の表現は原漢文に規制され、文末は「しむ」、「ごとし」、「す」等と再読されている。

又、訓読語の「ナシ」は

○爾（ナ（むち））惟（れ）辟（ツミ）（返）スルこと勿シ。（「尚書」-476・正文）

○今［也］・食（去）（返）スル毎に・余（あまリ）（返）無シ（「毛詩」-162）

右の如く、よく「無」「勿」等の漢字に付している故に、「ナシ」文末の多寡は「無」等の漢字の数と関連していると考えられる。

又、訓読文の各文体間の相違についても、日本語たる訓読語と原漢文とが連動しており、各文体の性格によってその相違が生じると考えられる。例えば、「尚書」中の地文は主に、

○太ー康・位（返）（返）を屍（ツカサト）て以て逸（入）ー豫（ヨ）ナリ　厥（の）徳（返）を滅（ホ）シて黎（レイ）ー民　咸（コトヽク）に貳（フタコヽロ）アリ　乃（ち）・遊（あそヒ）（返）（返）を盤（タノシ）ン

て度（去）（返）無シ　［于］有ー洛（の）［之］表（ホカ）（一）に畋（カ）（二）リて十旬マテに反（返）ラ弗　有ー窮の后（キミ）・羿（ケイ）・民の忍（返）（返）ヒ弗（サ）ルに因（ヨ）（二）て［于］河（一）に距（フセ）（二）ク　厥の第（ヲト、）・五人・其（の）母（一）に御（ハヘ）（二）リて以て従（シタカ）ヘリ　［于］洛（の）［之］汭（去濁）（一）に俟（マ）（二）ツ。五子咸（コトヽク）に怨（ウラ）ム　大ー禹（の）［之］戒（一）に述（シタカ）（二）て以て歌（返）を作ル（「尚書」136～141・本文）

右の如く、演説の背景、地点及び相関する人物を描く情報文であり、言葉に潤色が不要である故、命令形終止法が殆ど用いられておらず、推量助動詞「ム」、「ベシ」等の読み添え語も見られない。

一方、会話文の部分は、

○曰（イ（は））（く）朝ー夕に・誨（ヲシヘ）（返）（返）を納（イ）レて以て台（ワ）カ徳（トク）（一）を輔（タス）（二）ケヨ　若（し）金（音）ナラハ・汝（返）（返）を用（モ）て礪（レイ）（去）（返）と作（セ）ン。

若（し）巨ー川（一）を済（ワタ）（二）ラは・汝（返）（返）を用て舟ー楫（セフ）（入）（一）

と作(セ)(二)ン。歳(訓)大に旱(ヒテリ)セは汝を(返)(返)を用て霖(平)ー雨(一)と作(セ)(二)ン。乃(ナンチ)の心(返)を啓(ヒラ)イて朕(訓)か心(一)に沃(イ)(二)ヨ。若(し)薬・瞑(メン)(去)ー眩(イン)(去)(一)セ弗(サ)(二)ルトキンハ・厥の疾瘳(イ)(返)エ弗(「尚書」252～254・正文)

右の如く、演説の聴者に訴える言葉である為、漢文表現の抑揚が多彩で、命令形終止法が多出し、推量表現の「ベシ」も数多く用いられている。

又、原漢文は訓読に対する拘束が各文体の内部のみならず、

○黎(レイ)(平)ー民(コ)・於(カハ)に変リ・時(コ)に雍(ヤハラ)ク。(「尚書」9・正文)

○雍は和「也」。(「尚書」10・注文)

右の如く、所謂「訓詁」に於いて注文が正文に影響を与える場合も存する。右の両文に於いて、「雍」は注文で「和」と同様な意味で解釈している故に、正文では「雍」が「ヤハラク」と訓読されている。即ち、注文に存する漢字は正文の訓読語に影響している。このような訓詁の言語事項は「毛詩」中にも盛んである。実例を挙げると、

○以て[于]家ー邦を御(ムカフ)(イ)(ヲサム)(ケ)(「毛詩」445)

右の例では「御」の訓に、「毛伝」の「御(は)迎[也]。」によって「ムカフ」、「鄭箋」(『毛詩伝箋』)の「御(は)治[也]。」によって「ヲサム」の訓を定めており、和訓の後に各々「イ」(「傳」の人偏)、「ケ」(「箋」の竹冠の一部)の注記を朱書している。

しかし、文体差の起因は徹底して原漢文に由来するか。即ち、各文体の差違の基底に動いているのは原漢文の表現しかないのかという点については、そうではあるまい。「尚書」及び「毛詩」を例に取ると、

○孔は甚[也](「尚書」99・注文)

○謨ルトイハ[於]人(一)を謀(二)ルソ[也](「尚書」90・注文)

○能ク自(ミ)(つか)(ら)師(モロ〳〵)(返)を得ル者は王(ウ)(去)タリ。(「尚書」171・正文)

○蕩―蕩タル上帝・下―民(の)[之]辟(キミ)ナリ(「毛詩」485)

右の如く、同様に「断定」を表す文であるが、それぞれに「名詞」「ゾ」「タリ」「ナリ」を使用している。右の文に於いては、訓読語表現の前題としての原漢文の影響、即ち、原漢文の文字面によって謂わば必然的に成立した訓読表現とは考えにくく、むしろ、訓読という言語行為の中での日本語側の表現性の問題であろうと考えられ、これらが文末表現の差として現れている。

又、「尚書」の会話文中では、命令形終止法が目立つ。実例を挙げると、

○以て旧ー典文ー章(一)を変ー乱(二)スルこと無(か)レ[也](「尚書」415・正文)

○以て［於］前ー人（の）［之］政（一）を美（二）クセヨ。（「尚書」490・注文）

○営ー々（営）青ー蠅・［于］棘（一）に止（二）ヨ。（「毛詩」361）

右の例が存する。「命令形終止法」が原漢文の制約から全く無縁であるとはいえないが、「終止形」によって質実で文を述べるか、「命令形」で命令のニュアンスを表すか、ある程度で訓読語の側の表現の問題に帰する部分のあることであり、これにより、文末表現の差が生じると考えられるだろう。このような活用形の相違は同一もしくは意味の共通している漢字の訓に於いても見られる。例えば、右に言及した如く、今回の調査範囲に於いて訓読語の「ナシ」は殆ど「無」「勿」等の漢字に付されているが、

○猶（ほ）・且タ・為シ而恃（返）マ不・休（返）シと雖（も）・休（返）イこと勿シ。（「序文」17）

○後＿言（一）有（二）（る）こと勿（か）レ（「尚書」117・正文）

○今［也］・食（去）（返）スル毎に・余（返）無シ（「毛詩」162）

○勢ー位（返）に乗（り）て威民の上（一）に作（二）すこと無（三）（か）レ。（「尚書」474・注文）

右の例群が示している如く、文中の「無」「勿」「罔」等の漢字は終止形「ナシ」と読まれたり、命令形の「ナカレ」と読まれたりしている。当時の古辞書及び古点本も、

○己カ欲セ不ル所ヲ［於］人ニ施スコト勿カレ（高山寺本『論語集解』巻八51・清原点）

○礼学ヒ不ンハ以テ立ルコト無カレ［也］（高山寺本『論語集解』巻八42・清原点）

○無ナシ莫又ナカレ勿又ナカレ无失・・・令罔亡匪微靡毋不光ー造已上同（黒川本『色葉字類抄』ー中三六・ウ）

○勿上物モツ ナシ マナ ナカレ（観智院本『類聚名義抄』ー法下・五七）

右の如く、同様な傾向を示している。このような命令形で文を閉じることの原因は、加点者が原漢文中の命令の口調を読み取ったから、最文末を命令形にしたとも考えられるが、孤立語たる中国文語にはこのように文のモダリティによって語形が変わることがない故に、語形の転換は訓読語の側が関与していると思量される。「猶」「如」「若」の場合もこれと類する。「ナホ・・・ゴトシ」の再読する語形は「尚書」の注文にしか見出せないと記述した。確かに再読文字たる「猶」が注文にしか見えない故にこの差異が生じると認められるが、「猶」「如」「若」の中国文語文における意味を実際に調べると、

猶・・・『廣韻』似也。『詩・召南』寔命不猶。『傳』猶、若也。（『康

熙字典』巳集下・犬　部）

如…『集韻』『類篇』乃箇切、音那。亦若也。（『康熙字典』丑集下・女部）

若…又如也。『書・盤庚』若網在綱。（『康熙字典』申集上・艸部）

とある。これによってこの三つの文字の間に細かい使い分けが存するかもしれないが、その意味がある程度で近似もしくは共通していると判るだろう。ところが、今回の調査範囲に於いてこの三つの意味の近い漢字の内に「ナホ…ゴトシ」の再読する形式として出現するのは「猶」のみである。しかし、この「ナホ…ゴトシ」の分布は漢字の「猶」のみと連動しているとは認めがたい。

又、訓読文の文末体系に於いては、確かに文末は原漢文に規制される場合が存する。その一方で中国文語中ではテンス・アスペクトの文法的区別が殆どないが、日本語たる訓読語に於いては、

○則（ち）汝亦（た）・保一衡（の）［之］功（一）有（二）ラン［也］（「尚書」290・注文）

○蓋（し）・亦（た）・言フ［之］者は罪（返）無ク・聞ク［之］者は以て自（ら）戒（一）ムルか足（二）レリ。（「序文」50）

○其（の）事（を）掌ル者を舉（け）タリ［也］（「尚書」458・注文）

右の如く、漢字に助詞を読み添えることによって出来事のテンス・アスペクト的意味を記述する場合が多数存する。この助動詞の「ム・リ・タリ」は原文の制約ではなく、日本語の表現に起因して生じたものと考えられるだろう。

更にまた、左に言及した訓詁に於いても原漢文の制約で説明しきれないところが多く、「毛詩」に例を取ると、

○乱（の）［之］初（て）生ルこと・僭　始て既ク

（「毛詩」321）

右の例中の「涵」について「毛伝」では「涵（は）数。」、「鄭箋」では「涵（は）同。」と解釈している故に、「涵」に「イレラルレバナリ」及び「ヲナジクスレバナリ」と付訓したと考える。ところが、右傍の「ラル」と右傍左傍の「バナリ」の読み添え語は「毛伝」もしくは「鄭箋」が根拠となっているとは認め難い。よってこの表現は日本語側の問題であると判る。

上述の部分を纏めると、訓読文における文体の差異の成立には、原漢文の働く要素が大きいと認めねばならないが、読み添え語等の和文的要素も軽視できない言語事象である。即ち、和漢両方の要素は訓読行為を通じて渾然一体になり、共に訓読文を構築していると思量される。

終わりに

本論文では今後の研究に多くの課題を残しつつ、試論を述べた。断片的な研究ではあるが、「尚書」を取り上げてその内部的な文体差

を、「尚書」一巻中の文末表現の偏りに注目し論じてみた。また進んで、「序文」の文末表現体系の視点から文末表現体系の異同を論じてみた。

結果は、右に纏め論じた通りであるが、いま、筆者自身が、客観的な実証の問題として、どれぐらいの差があれば偏りとして認めて良いかと言うことである。例えば、「ナリ」文末の「尚書」に於いての分布状況は地文（3例4％）、会話文（56例8％）、注文（101例10％）である。即ち、地文と会話文との間に（4％）の差異が存する。筆者は「尚書」に於いて（4％）を超える単語は多くない（表一に詳しい）という考えに基づき、偏りが存すると意識し、表二に入れた。しかし、4％の比率は文体の差異を根本的に指し示す事ができるか、更に検討の余地がある。

又、今回の調査範囲に於いて、「ベカラズ」等の連語文末は稀である故に、便宜的に最文末の一語とした。しかし、この方法は「ベカラズ」中の「ベシ」について、最文末前の語を無視したこととなる。それを「ベシ」・「ズ」に分けてカウントする方法も採用できるかもれないが、いずれにしても「ベカラズ」の原意から多少に外れることは避けられない。

右の二点は共に用例数の不足によって生じた問題であるが、その根本的な原因は『群書治要』の性格に関わっていると思う。『群書治要』は帝王学の教科書であり、日本に於いても皇室で講読する為に用いられていた。その場合、複雑には入り組まないわかりやすい訓読を目指したかも知れない。この故に、金沢文庫本『群書治要』に於いて連語文末等の複雑な表現法が少なく、「キ」等の文末も稀である。即ち、その文末表現は単純である。この仮定は奥書等の現有資料から究明できず、想像に止まるしかないが、金沢文庫本『群書治要』ではその同系の古点本たる東洋文庫本『春秋経伝集解巻第十』に比べ、

○三（み）タ ヒ―進ミ三ヒ―伏ス（フ）。公省（返）ミ不。而て又（た）前ム（ス、）［也］

（巻五『春秋左氏傳中』12・注文）

三ヒ 進（メ）／ミ 三（ひ）伏セムトスレトモ・公・不省（ミ）而（て）又（た）

前（ス、）む［也］（『春秋経伝集解巻第十』78・注文）

○厚シ（き）斂に（し）て以て 牆（カキ）／ハシラ を彫（エカ）ク（『春秋経伝集解巻第十』73・正文）

厚ク斂（レン）（音）シテ以て牆（カキ）（返）を彫（エカ）ク（巻五『春秋左氏傳中』‐7・正文）

右の如く、複数訓を一訓化や読み添え語の省略が多出する。教隆は金沢文庫本『群書治要』に施点した時、家説に依りながら、自ら改訓している事は、

○（群書治要・巻一）建長七年八月十四日蒙洒掃少尹

尊教命加愚点了此書非潔

斉之時有披閲之恐仍先雖点
末暫致遅怠是向本書
事有其煩之故耳
前参河守清原（教隆花印）
同年九月三日即奉授蒙洒掃少
尹尊閣了抑周易者当世頗
其説欲絶爰教隆粗慣卦
爻之大体不堕訓説之相伝
雖為窮鳥之質争無称
雄之思哉
前参河守清原（教隆花印）

の奥書から判明する。そのもととなったのは『春秋経伝集解巻第十』の加点者たる清原頼業（一一二二～一一八九）が樹立した訓説である。この事情は既に先師の高説が存する[9]。即ち、教隆は先祖の頼業の訓説を参考にした上に、更にその訓読表現を簡略化した。その原因は当時の資に漢文訓読を伝授した時、更に理解しやすい為にした意識的な行動なのか検討する余地があるが、少なくとも両本の対照を通じて金沢文庫本『群書治要』は訓点の厚い点本と雖も、訓読表現はより簡明であると考えられるだろう。即ち、右に言及した、訓読表現上の簡明さによって用例数の不足の問題は今後、研究範囲を拡大する中で、解決できると期待している。

---

1 経部十巻は清原教隆が累代の家説に拠って加点したものである。史部の二十巻は藤原
2 唐・韓愈（768～824）・『進学解』「周誥殷盤[一〇]、詰屈聱牙[一一]。」　注釈　[一〇]周誥、此代尚書中之周書。周書中有大誥、康誥等篇。殷盤、此代尚書中之商書。商書中有盤庚篇。[一一]句意謂周書商書文字艱渋難懂。詰音潔、聱音敖。（『韓昌黎文集注釈』（上）巻一　韓愈　著　閻琦　校注　三秦出版社　二〇〇四年第一版）
3 『尚書今古文全壁』　郭仁成著　岳麓書社　二〇〇六年
『新釈漢文大系』　二十五・二十六巻　書経（上・下）　加藤常賢著　昭和六十三年第七版
『新釈漢文大系』　一一十・一一一・一一二巻　毛詩（上・中・下）　石川忠久著　明治書院　昭和六十三年第七版
『十三経注疏』　巻一　周易・尚書　藝文印書館主編　一九八五年
『十三経注疏』　巻二　毛詩　藝文印書館主編　一九八五年
等
4 森岡信幸『金沢文庫本群書治要鎌倉中期点経部の文末表現をめぐって』小林芳規博士喜寿記念国語学論集小林芳規博士喜寿記念国語学論集　汲古書院　2006年
春日和男『「也」字の訓について―「ぞ」と「なり」の消長』　国語国文二十四号　昭和三十年
等
5 古橋紀宏「後漢・魏・晋時代における堯舜禅譲に関する経書解釈について」後漢経学研究会論集・平成十七年三月
6 松本光隆『漢籍訓点資料に於ける文末表現について：醍醐寺本遊仙窟を中心に』　鎌倉時代語研究　平成二年十月
小林芳規「石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点の訓読語について」　訓点語と訓点資料　第七十一・七十二輯合併号　昭和五十九年五月
7 『国語学原論』（時枝誠記　岩波書店　昭和十六年）　第二章
8 築島裕「平安時代の漢文訓読について」　国語と国文学二六ノ五　昭和二十四年
9 鎌田正『旧鈔巻子本春秋経伝集解に於ける頼業の訓説とその伝授について』　書陵部紀要　八号　昭和三十二年三月

参考資料

宮内庁書陵部所蔵室生寺本『日本国見在書目録』　藤原佐世撰　名著刊行会刊行　平成八年
『金沢文庫本群書治要』　古典研究会編　汲古書院　平成十八年
『宮内庁書陵部蔵本群書治要経部語彙索引』　小林芳規　汲古書院　平成八年

『大辞泉』　小学館　平成十年
『日本国語大辞書　第二版』　小学館　平成十三年
松本光隆「高山寺蔵金剛頂瑜伽経寛治二年点の訓読法：訓点資料における文末表現体系記述の試み」　高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集（平成二十一年度）
松本光隆「石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点における訓読語の文体」　訓点語と訓点資料　一二七号　平成二十三年九月
菅原範夫「平家物語の文末表現：覚一本と延慶本との相違について」　鎌倉時代語研究十二号　昭和六十四年七月
「金澤文庫本群書治要訓点用語集稿（一）」　李玉婷・王徳俊　広島大学日本語史研究論集　第一号　平成二十七年三月
『新日本古典文学大系』　一～四巻・別巻（索引）　万葉集　佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注　岩波書店刊行　平成十一年五月